

大和都市計画事業大和小泉駅土地区画整理事業に伴う

来光遺跡

第1次発掘調査概報

1992.3

大和郡山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、大和郡山市小林町で実施した「来光遺跡」の第1次発掘調査概報である。
2. 調査は、大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業を契機として実施した。
なお、今回の調査は、同事業中の大和中央道部分にあたる。
3. 調査期間は、下記の通りである。

平成3年11月18日～同12月27日

4. 調査は、下記の組織で実施した。

(1) 現地調査

〔調査員〕

大和郡市教育委員会 山川均

〔補助員〕

伊藤敬太郎、荒木浩司、本村充保、坂口弘貢（以上奈良大学）、武田浩子

〔作業員〕

岸田勝信、中川憲、堀川正治、米田利男、杉山典三、大橋一夫、今西卯之松、谷潤喜一、
市井義治、加奥勝、川畠勇一、西畑利一、杉岡雪子、杉岡克子、城タマエ、喜多美寿子

(2) 事務

大和小泉駅前地区画整理工事事務所

5. 本概報は、下記の分担で作成した。

〔製図、トレース〕

武田、荒木、本村、坂口、山川

〔写真〕

山川

〔執筆、編集〕

山川

6. 本概報作成に際し、奈良市教育委員会、中井公氏よりSX-01出土平瓦に関して種々
の貴重なご教示を得ました。厚く感謝いたします。

本文目次

I 調査の契機および経過	1
II 調査地の位置および環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	4
III 調査の概要	
1. 調査方法	6
2. 層序	6
3. 造構 (SX-01)	9
4. 遺物	10
IV まとめ	16

図表目次

図1 大和郡山市の位置	
図2 来光遺跡および周辺の遺跡 (S : 1/30,000)	3
図3 トレンチ配置図 (S : 1/1,000)	6
図4 基本土層柱状図 (S : 1/20)	6
図5 SX-01平面図および縦断面図 (S : 1/20)	7~8
図6 SX-01土層断面図 (S : 1/20)	9
図7 SX-01出土土器実測図 (S : 1/3)	11
図8 SX-01出土平瓦拓影1 (S : 1/4)	12
図9 " 2 (S : 1/4)	13
図10 SX-01出土埴輪および実測図 (S : 1/3)	14
図11 来光遺跡出土石器実測図 (S : 1/2)	15
図12 来光遺跡、高月遺跡、北の横大路 位置相関図 (S : 1/2,000)	16
表1 周辺遺跡一覧表	3

写 真 目 次

写真1 高月遺跡遺構検出状況（第2次調査） 1

図 版 目 次

図版1 SX-01遺物出土状況（北より）

図版2 1 " (部分)

2 " (")

図版3 1 " (")

2 SX-01発掘状況（南より）

図版4 遺物

図版5 "

図版6 "

図版7 "

図版8 "

図版9 "

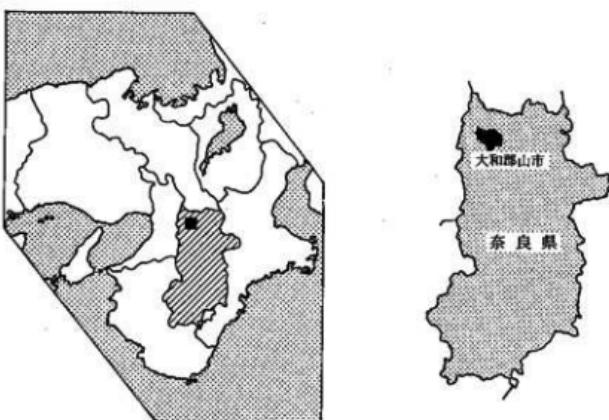


図1 大和郡山市の位置

I 調査の契機および経過

大和郡山市は、JR 大和小泉駅前において総面積19.5ha に及ぶ土地区画整理事業を、平成元年度より実施してきているが、市教育委員会では年度毎に事業予定地において、埋蔵文化財有無確認のための試掘調査を実施している。その主な成果として、図12に示した地区より、7世紀代に属する掘立柱建物10棟、溝、土坑などを検出しており（高月遺跡）、先に報告書も刊行した。²

こうした調査は、今回の米光遺跡も含めてすでに4次を数えている。今回のものも含め、各々の調査期間は以下の通りである。

（1）第1次調査

平成2年1月12日～同3月15日

（2）第2次調査

平成2年4月16日～同6月16日

（3）第3次調査

平成2年12月1日～平成3年3月31日

（4）第4次調査（米光遺跡第1次調査。今回報告分）

平成3年11月18日～同12月27日

なお、事業対象地内での調査は今後も継続して実施する予定である。

<註>

- ① 山川均『高月遺跡発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会、1991



写真1 高月遺跡遺構検出状況（第2次調査）

II 調査地の位置および環境(図2)

1. 地理的環境

大和郡山市は、地形の上で、市域の中央やや東寄りを南北に貫流する佐保川によって、東西におまかに分けることができる。佐保川の東側は、天理市域の丘陵を開析する諸河川（北から地蔵院川、菩提仙川、高瀬川）が形成する緩傾斜の扇状地が広がっており、その扇端を佐保川氾濫原に接する。これに対し、佐保川の西側には、旧富雄川が形成した緩傾斜の扇状地が広がっている。現在の富雄川はほぼ南北に一直線に貫流しているが、これは近世期における治水事業、すなわち堤防による川筋固定の結果である。本来、富雄川は東南方向に鳥趾状に網流し、佐保川に合していた。現在も、それは旧流路および埋没自然堤防等によって航空写真により、判読が可能である。現在の富雄川は、扇状地の扇側部を流下し、大和川に合しているのである。

今回の調査地は、この富雄川緩傾斜扇状地上に立地する。区画整理事業地内においても、旧富雄川の旧河道（旧岡崎川？）が認められるが、それ自体の形成年代は不明である。ただ、興味深いことに、それは前回報告した高月遺跡と、今回報告する来光遺跡の間をほぼ南北に流下している。この両遺跡は、旧河道が形成した微高地に立地しているのである。

なお、調査地周辺の地形は南に向かってゆるやかに下がっており、端はその南にある額田部丘陵に接する。この額田部丘陵は大阪層群より成る、頂面が平坦な丘陵であり、現在は工業団地によって旧地形や遺跡は大幅に損なわれている。丘陵の南端は大和川氾濫原に接しており、それにそそぐ小河川が形成した多くの開析谷をもっている。かつてはそうした谷中に水田が営まれたというが、現在は耕地の大半が果樹園もしくは畑となっている。

また、富雄川緩傾斜扇状地の西側には矢田丘陵より派生する中～低位の段丘群、あるいは古期扇状地がある。現在は住宅開発によってかつての景観は損なわれつつあるが、部分的に果樹園ないし谷水田などが遺存している。

来光遺跡からは、間近に矢田丘陵の青垣を眺め、東方には春日断層による青垣を見、遠くには二上山や葛城山系を望することができる。それはまさに国中という言葉のイメージと重なる。また、遺跡の傍らをかつて流下していたであろう河川は（旧岡崎川？）、南方で大和川に合し、河内平野へと流れ出る。すなわち、水運の便はきわめて良好な地域でもある。さらに、陸路としては北の横大路が文字通り遺跡と接する位置を通っている。高月遺跡と来光遺跡は、水路、陸路ともに難波との交通の要衝に立地するといってよいだろう。



図2 来光遺跡および周辺の遺跡 (S : 1 / 30,000)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	来光遺跡	飛鳥	16	笠尾古墳	"(")	31	遺物散布地	奈良
2	高月遺跡	飛鳥	17	筒井城	室町	32	"	"
3	慈光院	奈良～	18	小泉城	中世～近世	33	"	古墳
4	古屋敷遺跡	绳紋～近世	19	番条城	中世～	34	"	奈良～室町
5	清瀬寺遺跡	古墳	20	新木丸山古墳	古墳(後)	35	"	"
6	西田中遺跡	弥生(中)	21	稗田躍瀬集落	中世～	36	"	古墳～鎌倉
7	菩提山遺跡	弥生～古墳	22	稗田・若槻遺跡	弥生～中世	37	西田中瓦窯	奈良
8	原田遺跡	古墳	23	下ツ道	飛鳥～平安	38	古墳	古墳
9	本庄・杉町遺跡	古墳～近世	24	北の横大路	"	39	遺物散布地	"
10	下ノ田遺跡	古墳	25	外川遺跡	弥生(後)	40	慈光院裏山遺跡	弥生
11	小泉大塚古墳	"(前)	26	遺物散布地	奈良	41	小泉遺跡 (大塚山遺跡)	弥生(後)
12	六道山古墳	"(後)	27	"	古墳			
13	小泉狐塚古墳	"(後)	28	"	奈良			
14	小泉東孤塚古墳	"(")	29	南鬼塚遺跡	古墳～中世			
15	割塚古墳	"(")	30	遺物散布地	中世			

表1 周辺遺跡一覧表

2. 歴史的環境

本項においては、富雄川緩傾斜扇状地上、およびその周辺の丘陵上の遺跡について概観する。(以下、「本地域」と略する)。

本地域においては、慈光院裏山(40)よりサヌカイト製の有舌尖頭器が一点出土している。現在までのところ本地域では最古の遺物であるが、本例は弥生時代(Ⅲ期)の溝状遺構より検出されたものであり、該期における他地域からの搬入、2次的の使用の可能性もある。ただし、上部大阪層群より成る段丘上に繩紋時代草創期の遺跡が存在しても、何ら不自然ではない。今後の周辺調査が期待される。

さて、確実に本地域において人類の居住を認めうる遺跡としては、古屋敷^④(4)および原田^⑤(8)があり、いずれも繩紋時代後期後半の土器が出土している。

ついで、弥生時代の遺跡としては、前述の古屋敷(4)より草期の凸帯文土器が出土している。なお、この古屋敷から満願寺^⑥(5)にかけての範囲は本地域における拠点的集落として捉えよう。

弥生時代中期に至ると、西隣する矢田丘陵派生段丘上、および南側の額田部丘陵上(図面外)において集落が展開する。西田中^⑦(6)や菩提山^⑧(7)、慈光院裏山(40)などはその代表である。また、低地上では後に大規模な集落となる原田(8)などで集落が営まれる。

古墳時代に至ると、段丘上の集落は途絶え、かわってそれらと重複して古墳が築造されるようになる。小泉大塚^⑨(11)、小泉東孤塚^⑩(14)、六道山^⑪(12)、割塚^⑫(15)、笹尾^⑬(16)などがそれであり、いずれも各時期ごとの盟主墓としての性格をもつものである。このほか、小規模なものとしては慈光院裏山(40)や菩提山(7)で、墳丘を削平された古墳の周濠部等が検出されている。

古墳時代では、上記したように墳丘上の集落は庄内～布留期前葉で絶えるが、低地ではいくつかの集落が認められる。代表的なものとしては、満願寺(5)、原田(8)、本庄・杉町^⑭(9)などがある。なかでも原田では中期以降、溝で区画された大規模な掘立柱建物群が確認されている。

飛鳥時代～奈良時代にかけては、前節でも触れたように高月遺跡(2)がある。7世紀中葉の掘立柱建物群から成るこの遺跡の南方約200mには「北の横大路」(24)が存在したといわれる。この北の横大路は、西へ向かえば亀ノ瀬を越えて河内へ至り、東では下ッ道と交差し、その後都祁、山添を経て伊賀へと至るルートである。

ついで、中世以降の遺跡について述べる。この時代の主要な遺跡としては、城郭がある。筒井城^⑮(17)は、前記した北の横大路に接するように築かれた中世城郭である。興福寺大乗院官符衆徒であった筒井順慶が、郡山城に移封されるまでの拠城として利用されたもので、現在も掘割りの一部は良好な状態で遺存している。

また、小泉城^⑯(18)は、興福寺大乗院方衆徒小泉氏の拠城である。近世には片桐氏一万五千石の拠城として栄えた。他に城郭としては、興福寺大乗院方衆徒番条氏の拠城である番条城^⑰(19)があ

る。佐保川が形成した自然堤防上を占地しており、南北に長い形状を呈するが、厳密には3つの郭から成ることが知られている。

＜註＞

- ①竹田政敬「慈光院裏山」「大和を掘る」1988年度 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1989
- ②林部均「古屋敷遺跡」「奈良県遺跡調査概報」1986年度 奈良県立橿原考古学研究所、1989
- ③山川均ほか「原田遺跡第3次発掘調査報告」大和郡山市教育委員会、1992
- ④藤井利章「満願寺遺跡発掘調査概要」「奈良県遺跡調査概報」1982年度 奈良県立橿原考古学研究所、1983
- ⑤服部伊久男「西田中遺跡第1、2次調査概要報告」大和郡山市教育委員会、1985
- ⑥服部伊久男「菩提山遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1988
- ⑦伊達宗泰「小泉狐塚・大塚古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32号 奈良県教育委員会、1966
- ⑧伊藤勇輔・楠元哲夫「東狐塚古墳」「奈良県文化財調査報告書」第28集 奈良県立橿原考古学研究所、1976
- ⑨服部伊久男ほか「六道山古墳第2次緊急発掘調査報告」大和郡山市教育委員会、1992
- ⑩小島俊次「割塚古墳の調査」「青陵」No.14 奈良県立橿原考古学研究所、1969
- ⑪東潮「笛尾古墳発掘調査概報」1981年度 奈良県立橿原考古学研究所、1982
- ⑫山川均「本庄・杉町遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1989
- ⑬岸俊男「大和の古道」「日本古文化論叢」奈良県立橿原考古学研究所、1970
- ⑭山川均「筒井城第3次森目地区発掘調査概報」大和郡山市教育委員会、1991
- ⑮村田修三「日本城郭大系」第10巻 新人物往来社、1980

III 調査の概要

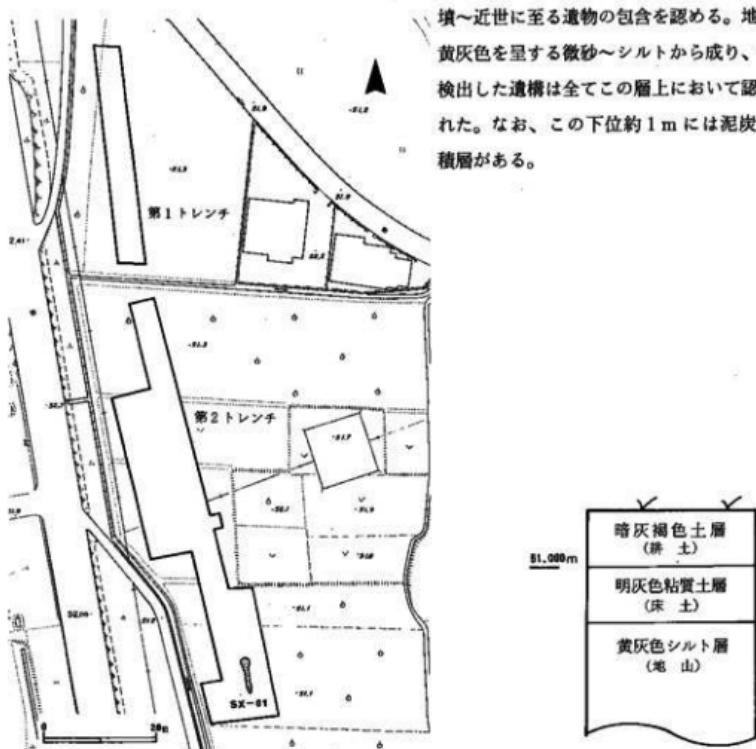
1. 調査方法(図3)

調査は、道路予定地に幅4mのトレンチを設定して実施した。その結果、遺構あるいは包含層を確認した部分においてトレンチの拡張を実施した。とくに、第2トレンチ南拡張区においては、7世紀の遺構であるSX-01を確認することができた。他の地区については、近世期の溝やピット群を確認しているが、顕著なものはない。なお、その詳細は後日別稿にて報告したい。

2. 層序(図4)

米光遺跡の基本層序については、図4に示したとおりである。床土(明灰色粘質土層)中には古

墳～近世に至る遺物の包含を認める。地山は
黄灰色を呈する微砂～シルトから成り、今回
検出した遺構は全てこの層上において認めら
れた。なお、この下位約1mには泥炭の堆
積層がある。



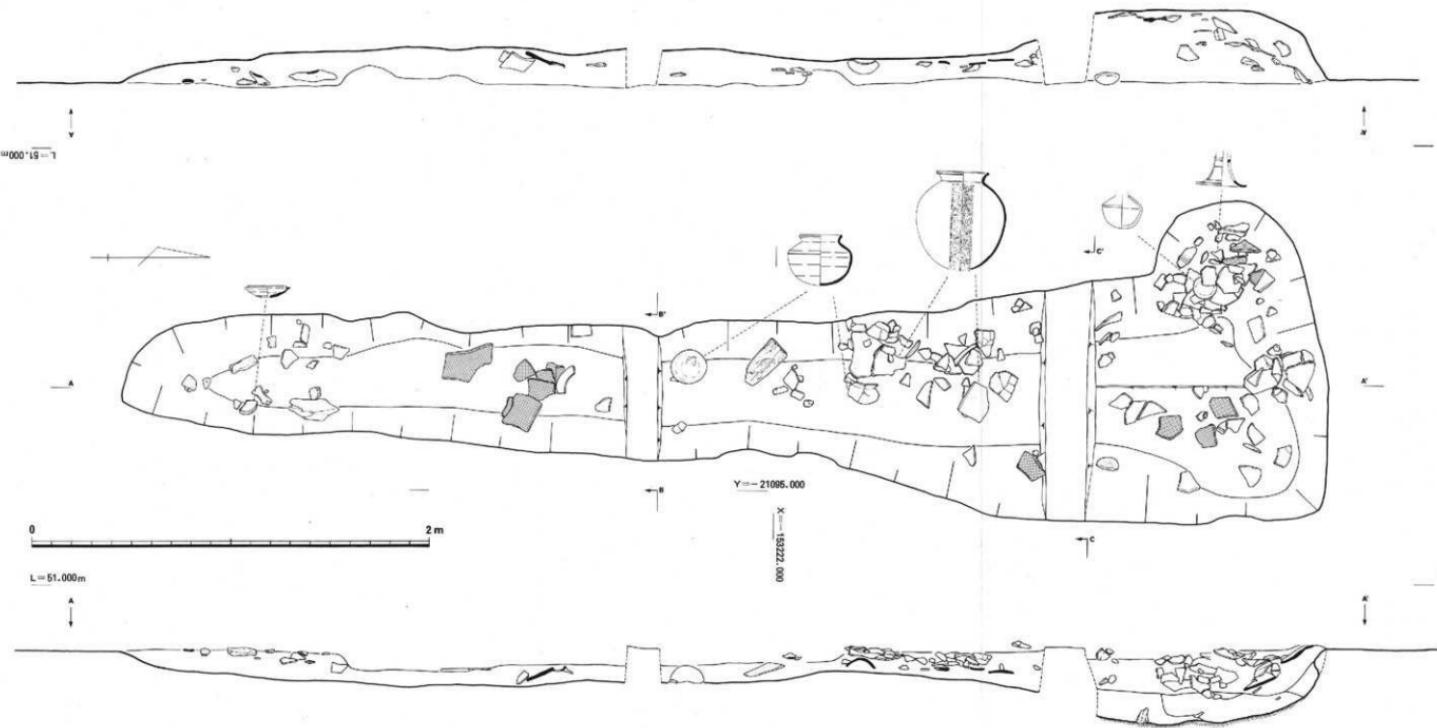


図5 SX-01 平面図および縦断面図 (S : 1/20 出土遺物のうち瓦はトーンで表示)

3. 遺構 (SX-01 図5、6)

今回の調査では、ここに報告する SX-01 の他に中世の溝状遺構、近世の素掘溝、ピット、溝等の遺構を検出しているが、それらについての報告は後日、隣接地の調査後にまとめて行うこととし、今回は割愛する。

SX-01は、調査地の南端付近で検出した細長い土坑状の遺構である。全長は、6.1mを測る。なお、平面形は北端で括がっているもので全体としてオタマジャクシのような形となる。また、拡張部では深度も深くなっている。幅は最大部（拡張部）で1.6m、中央付近で0.7mを測る。深さは括張部で40cm、中央付近で20cmである。

堆積土については、上層に暗褐色砂質粘土層（①層）がみられ、今回の出土遺物の大半は当該層より出土している。その下位には灰色粘土層（②層）の堆積を認めるが、この層には遺物はほとんど含まない。なお、拡張部においては②層下に黄茶色粘土層（③層）、および灰色砂質粘土層（④層）の堆積を認める。いずれも遺物はほとんど含まない。こうした遺物の出土状況より判断すると、②～④層に関しては遺構自体の整形にともなう堆積土、①層に関しては遺構の人为的埋積に伴うもの、と考えるのが適切と思われる。

次に、遺構の方向についてであるが、図5に示した国土地標によっても明らかなように、この SX-01は、ほぼ南北方向に伸びた遺構である。これは、隣接する高月遺跡の掘立柱建物群と共通する要素である。

また、統項で述べるように、この SX-01 中からは須恵器編年上の TK-217型式に属する須恵器と共に併して、平瓦の出土が認められる。この須恵器から知られる遺構の所属時期もまた、高月遺跡の掘立柱建物群とこの遺構の（埋没）時期が parallel であることを示している。瓦の出土はこの時期（7世紀第2四半期）において該地周辺に瓦葺建物が存在したことを示す傍証となり得るであろう。

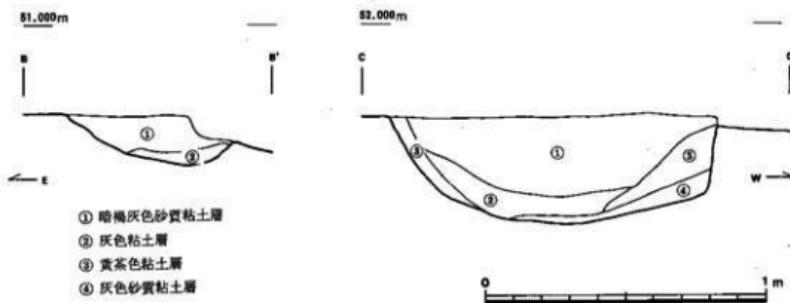


図6 SX-01 土層断面図 (S : 1/20)

4. 遺物 (SX-01、ただしS1は包含層)

[土器 (図7、図版4)]

1は、須恵器杯身である。TK-217型式に属するもので、SX-01の（埋没）時期を示す良好な資料である。なお、底部外面に一条の沈線から成るヘラ記号を有する。口径10.7cm、最大径12.8cm、高さ3.4cmを測る。

2は、須恵器短頸壺である。体部上半と下半間に一条の沈線を有する。口唇部は外側に肥厚させている。この資料は焼きが非常に甘く、一見瓦質土器のような印象を受けるものである。口径11.4cm、体部最大径18.2cm、器高14.3cmを測る。

3は、須恵器高杯の脚部である。長脚の2段透かしを有する資料である。据径13.5cmを測る。

4は、須恵器壺である。体部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキがみられる、なお、口唇部は外側に肥厚する。口径21.8cm、体部最大径38.8cm、器高（一部欠失）41.9cmを測る。

5は、土師器壺である。頭部以上を欠失する。体部上半外面はヨコナデ、同下半はヘラケズリが施される。内面はヨコナデを施す。また、外面には黒斑が認められるほか、内面には炭化物の付着をみる。体部最大径11.0cmを測る。

[瓦 (図8、9、図版6、7、8)]

SX-01からは、平瓦が若干出土している。縦じて薄手で、粘土板桶巻きによって成形されたものである。なお、瓦には桶の分割突帯の痕跡を有する。また、分割破面は未調整であり、凹面には部分的に糸切り痕跡を遺している。

調整は、凸面は斜格子タタキがみられ（図版8）、それをゆるくナデ消す。凹面には布目痕（図版8）がみられるほか、前記のとおり分割突帯痕や糸切り痕等もみられる。

なお、出土した瓦はすべて2次焼成の痕跡がみられ、このことはこれらの瓦が被覆していた建物が火災などの要因によって廃絶したことを見せるものかもしれない。瓦の形態上、ないしは技法上の特徴よりみて、これらの所属する時期は伴出した須恵器の示す時期（7世紀第2四半期）とほぼ整合するものと思われる。

[埴輪 (図10、図版5、6)]

SX-01からは円筒埴輪、ならびに形象埴輪も出土している。これら埴輪は、時期的な差から考えておそらく近在した未知の古墳に伴うものであろう。つまり、これらは混在品として考えられる。

円筒埴輪(H1～H7、H9、10)は、縦じて内面ナデ、外面タテハケによる調整がみられ、第V期の特徴を備える。ただ、タガの突出度が比較的高く、整形はシャープである。また、いずれも比較的大型の埴輪の破片である点は注意される。焼成はいずれも須恵質である。なお、H8のみは内、外面にヨコハケがみられ、焼成も他に比してやや甘いなどの特徴があり、時期的に他のものよりやや古いものである。

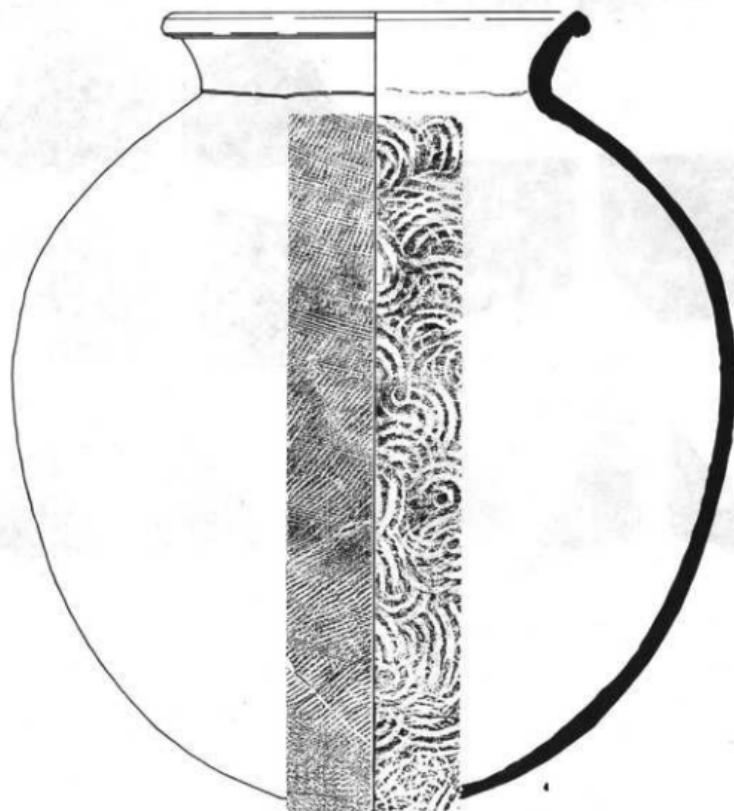
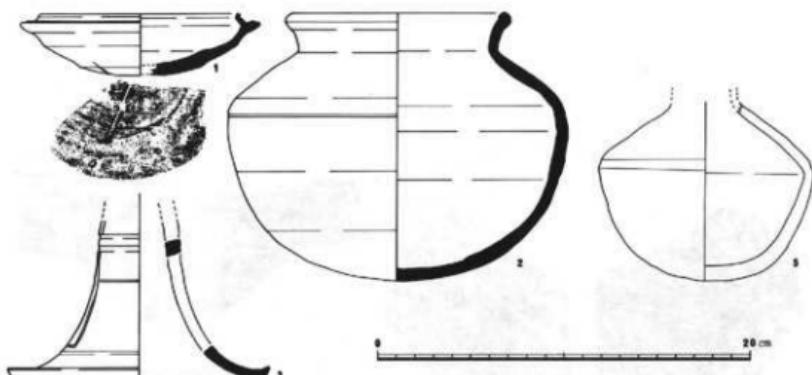


図7 SX-01 出土土器実測図 (S : 1 / 3)

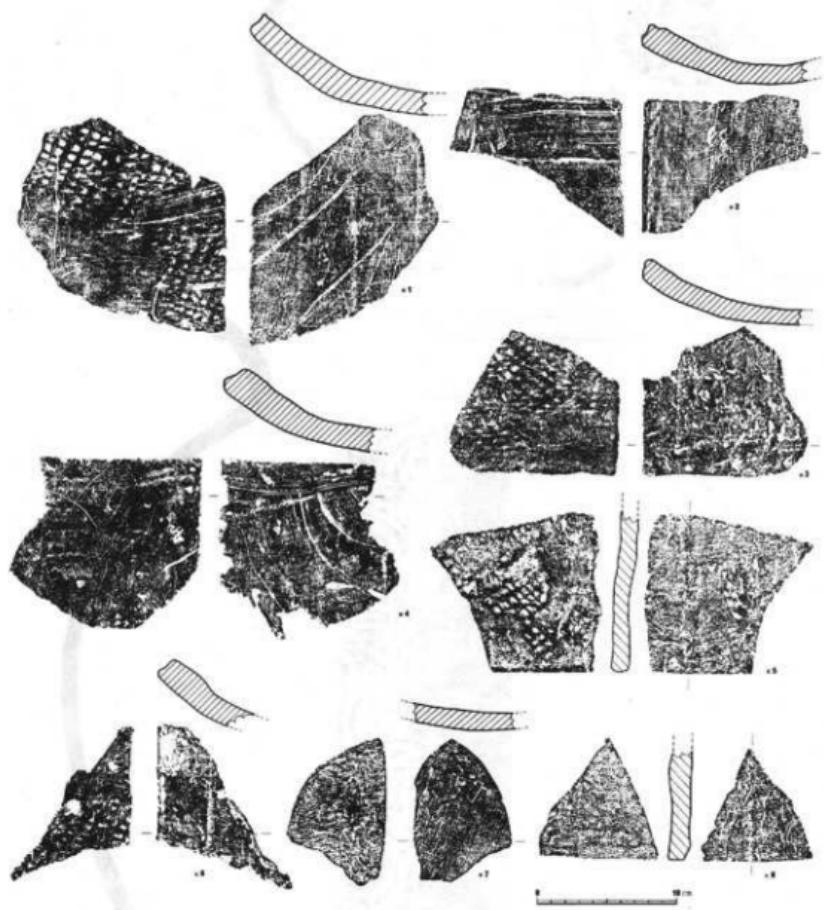


图8 SX-01 出土平瓦拓影1 (S : 1/4)

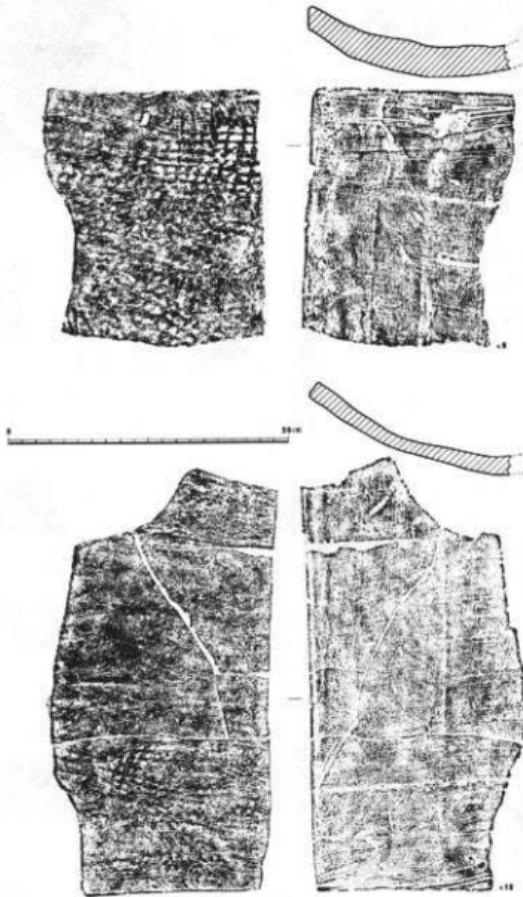


圖9 SX-01 出土平瓦拓影2 (S : 1/4)

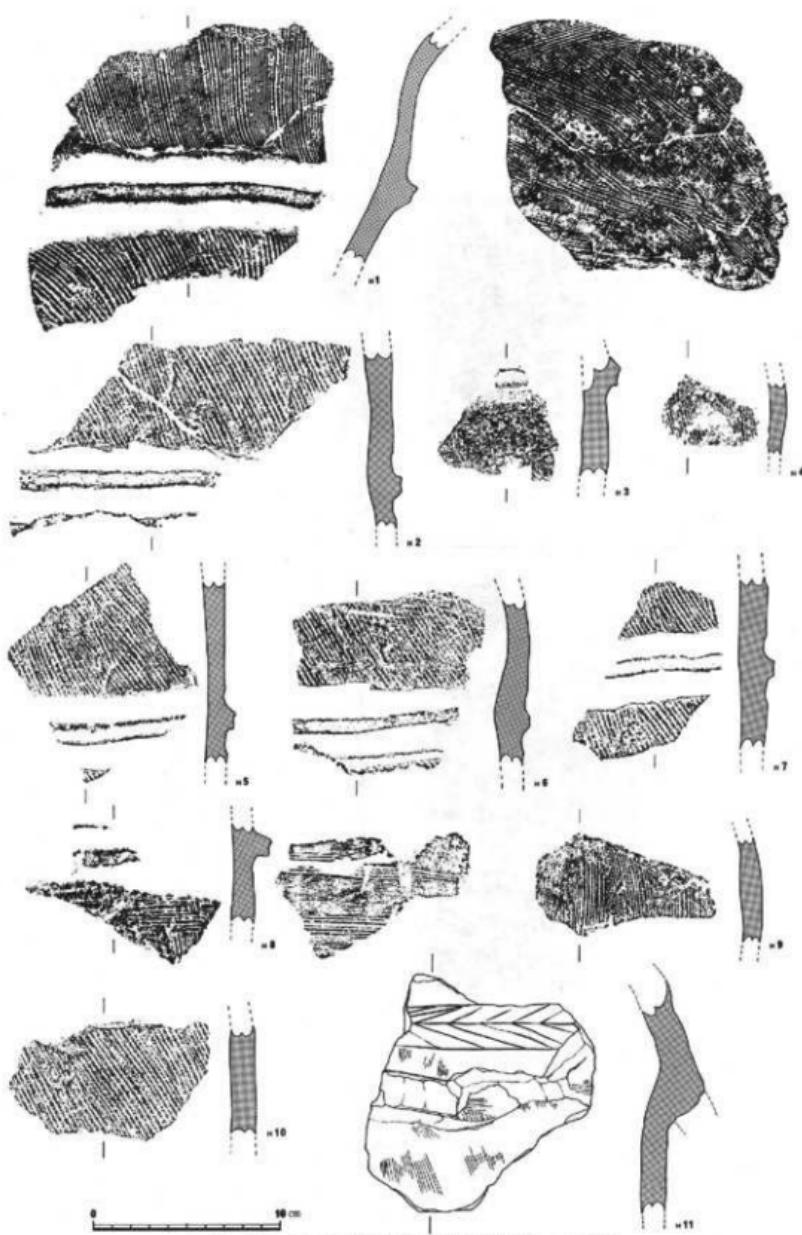


図10 SX-01 出土埴輪拓影および実測図 (S : 1 / 3)

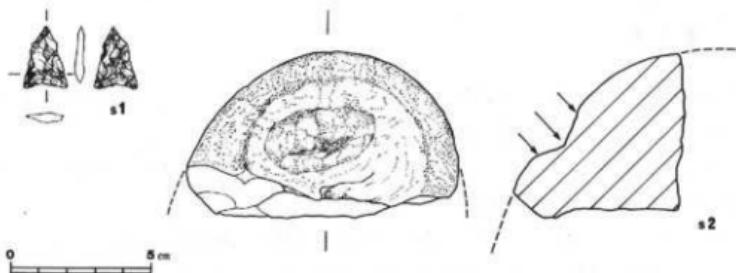


図11 米光遺跡出土石器実測図 (S 2 = SX-01 S : 1/2)

次に、形象埴輪としてはH11にあげたものがある。外側には有軸の綾杉文がみられ、その上下端を沈線によって画している。破片のため種別は不明であるが、器財形埴輪の一部であろう。

〔石器、石材（図11、図版9）〕

ここにあげた石器、石材のうち、S1のみは包含層より出土したもので、SX-01に伴うものではない。S1は、サヌカイト製の凹基式打製石鎌である。基部のくぼみはきわめて浅い。長さ22.1mm、幅15.2mm、厚さ3.1mmを測る。

S2は、砂岩製の石皿である。1ヶ所に深さ9.5mmの凹みをもつ。

S3（図版9）は、サヌカイト製のフレイクである。長さ31.5mm、幅18.2mm、厚さ6.1mmを測る。

S4・5（図版9）は、安山岩の石材である。とくにS4は上部に整形痕を明瞭に残しており、かつ火を受けた痕跡がある。これら石材は後述のS6・7も含め、建造物に伴うものと考えられるが、火痕を有する点においては既述の平瓦と共通している。

S6・7は、黒色片岩の石材である。S6は上端に研磨による整形痕を有する。

IVまとめ

本概報のまとめとして、今回の調査、とくにSX-01を通して知り得た点、および推定される点を以下に列記し、今後の周辺調査への備えとしたい。

1. SX-01の時期は7世紀（第2四半期）であり、これは約200m西方に位置する高月遺跡（掘立柱建物群）の時期と整合する。（図12）
2. SX-01出土中に平瓦がみられることから、近在して瓦葺きの建物の存在が考えられる。また、且つ、あるいは石材に火痕を有することから、その建物は火災によって廃絶した可能性がある。
3. 来光遺跡、高月遺跡は官道である「北の横大路」から北へ200mの位置にあり、また、建物やSX-01の方向性が正方位を指向している点などに、横大路との関連が看取されうる。

以上の諸点のうち、2に関してはSX-01の東北に方形状の高まり、（図3参照）がある点が留意される。あるいは、この高まりが主建物の存在した地域を示すものかもしれない。ちなみに、この高まりも区画整理事業範囲なので、今後調査を実施する予定である。今回報告したSX-01の性格などの具体的な考察は、それら隣接の調査が終了した後、改めて実施したいと考える。

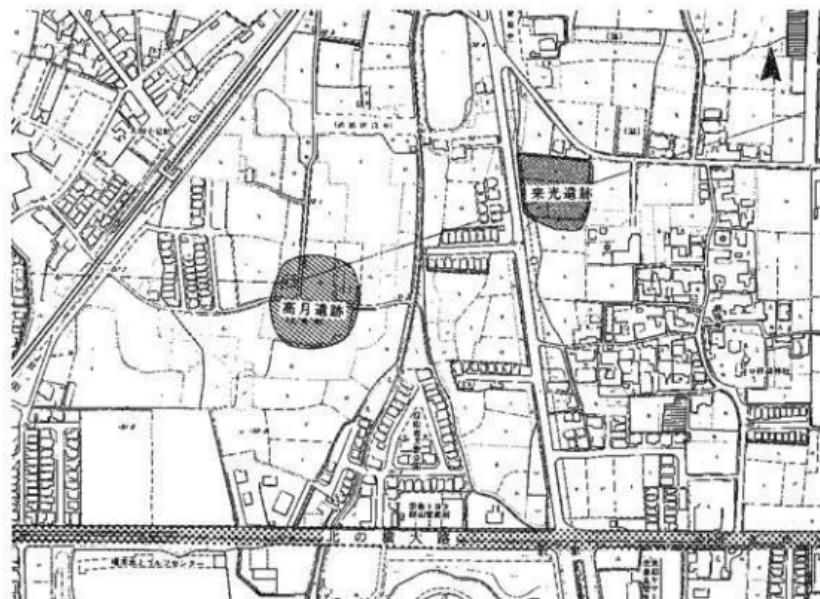


図12 来光遺跡、高月遺跡、北の横大路 位置相関図 (S : 1/2,000)

図 版



SX-01 遺物出土状況（北より）



1. SX-01 遺物出土狀況（部分）



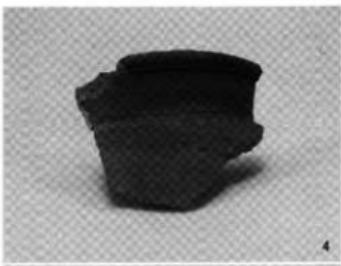
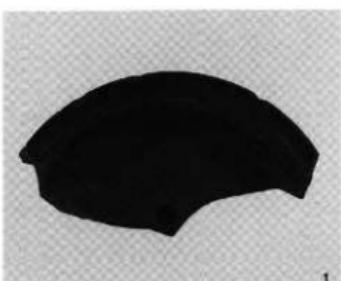
2. 同 上

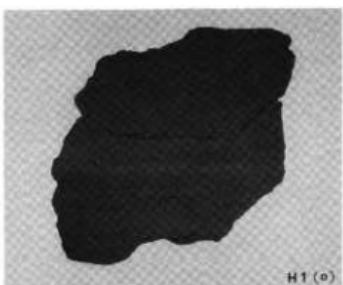


1. SX-01 遺物出土状況（部分）

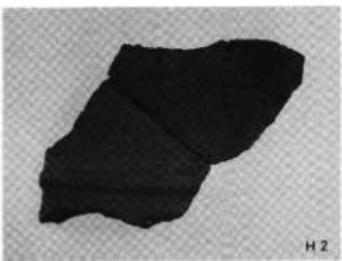


2. SX-01 完整状況（南より）

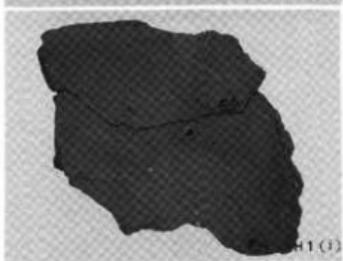




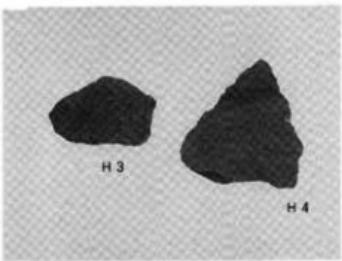
H1 (o)



H2

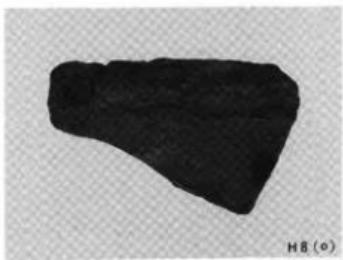


H1 (i)



H3

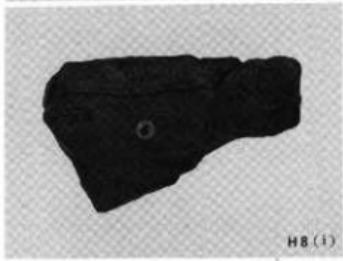
H4



H8 (o)



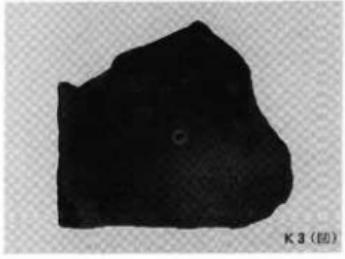
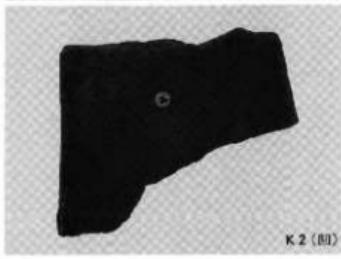
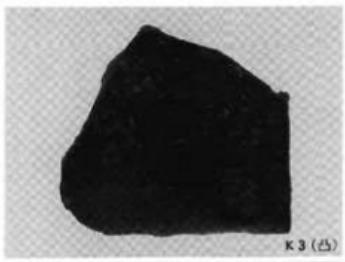
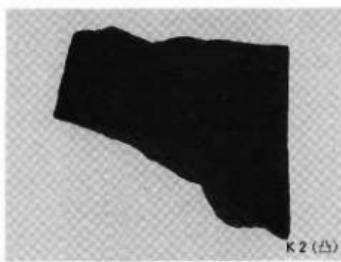
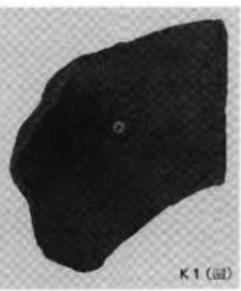
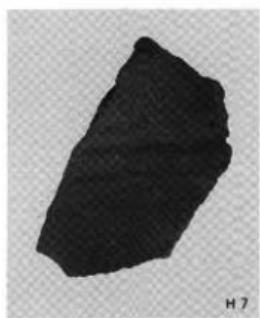
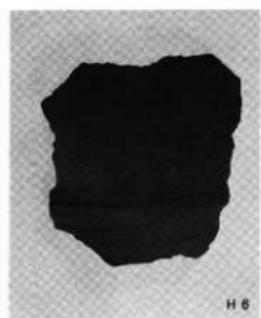
H9



H8 (i)



H10

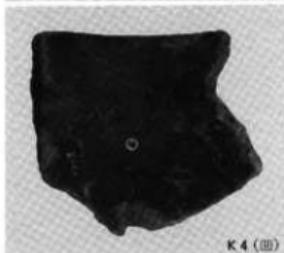




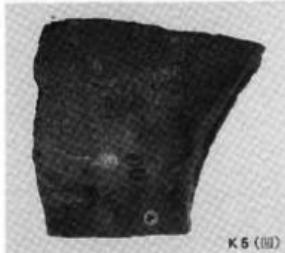
K 4 (凸)



K 5 (凸)



K 4 (凹)



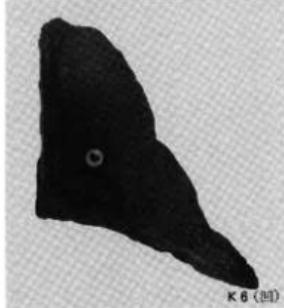
K 5 (凹)



K 6 (凸)



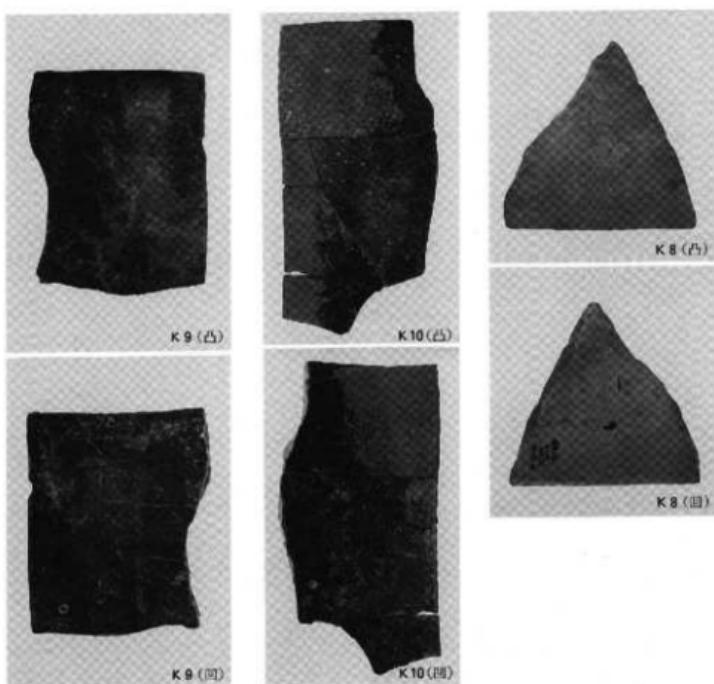
K 7 (凸)



K 6 (凹)

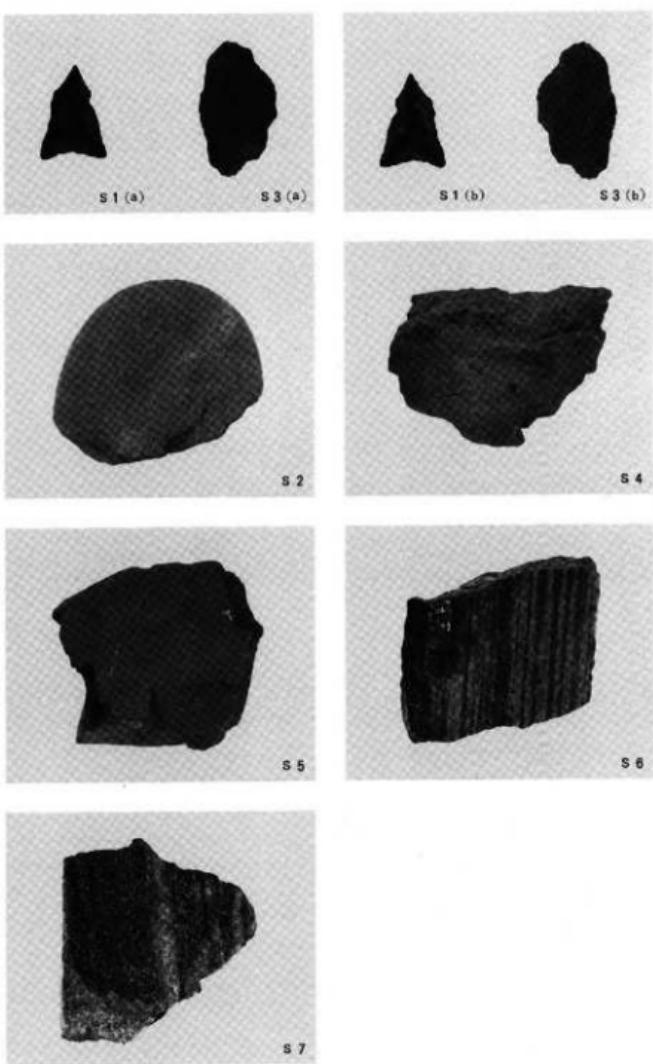


K 7 (凹)



凸面斜格子タタキ（後にナデ）

四面布目及び糸切り痕



平成4年3月31日 発行

大和郡山市文化財調査概要 24

来光遺跡

第1次発掘調査概報

編集 大和郡山市教育委員会

大和郡山市北郡山町248-4

発行 大和郡山市都市整備部

大和小泉駅前区画整理工事事務所

大和郡山市小林町170-2

印刷 明新印刷株式会社

奈良市橋本町36